

# 女子学生・生徒の「身体的」障害者イメージについての一考察

とく ちん あつ こ ふじ た だい すけ\*  
徳 珍 温 子・藤 田 大 輔\*

## 1. はじめに

平成14年18.5%であった老人人口は、平成15年では19.0%に上昇しており、年少人口の減少とともに、少子高齢化という現在の日本の状況から<sup>1)</sup>、介護の需要が高まっていくことは、容易に予測できるところである。

老人福祉と老人保健の充実をめざして導入された介護保険をはじめとする今日の行政サービスは、いわば、介護が必要である障害を持つ人や老人の生活の場を、施設から地域へと戻すものであり、それは、住み慣れたところで、そこに住む人々とともに、生き生きと生活するための支援の1つである。

このような、地域中心型の老人保健や老人福祉といった社会の動向の中で、障害を持つ人や高齢者を支えていく中心となる、高校生や大学生といった若い世代の人々が、障害を持つ特別なニーズのために支援を要する人々を、どのようにイメージしているのか、また、どのような要因が、障害者支援に対して肯定的なイメージを形成するのかを、明らかにすることを第一の目的とし、今後、若い世代の

人々の障害者支援が促進するためには、どのような教育的介入方法が有効であるのかを検討することを第二の目的として、本調査を行った。

## 2. 調査方法

### 2.1 調査対象者

大阪府下にある高等学校および、大阪府、兵庫県下にある3大学に在籍している女子学生・生徒409名に対し、質問紙法による調査を行った。

対象者の内訳は、回収された409の回答のうち、高校1年生79名、高校3年生107名、大学生223名で、大学生223名のうち、25歳未満の大学生212名で、25歳以上の大学生は11名であった(表1)。

### 2.2 語句の限定

「障害」は、身体障害、知的障害、精神障害など、様々な状態があることから、調査対象者が、具体的にイメージして回答できるように、「障害」を「身体的障害」に限定し、質

表1 調査対象者

高校1年生	高校3年生	大学生 (25歳未満)	大学生 (25歳以上)
79名	107名	212名	11名

N=409

\* 大阪教育大学 学校危機メンタルサポートセンター (National Mental Support Center for School Crisis)

問紙に明記した。

### 2.3 フェイスシート

フェイスシートには、学年および年齢・性別・家族構成(祖父母との同居体験、兄弟姉妹の有無)・身体障害を持った人との接触経験の有無の回答を求めた。

また、接触経験のある群に対して、①近親者、自発的な接触経験である、②友人、③ボランティア活動、教育的介入による、④実習などの学校のカリキュラム、⑤施設見学、として接触経験の内容の回答を求め、①～⑤の項目に該当しない接触経験については、⑥その他、とし、接触経験の具体的な内容を記述できるようにして、接触経験の頻度を確認した。

### 2.4 「身体的障害」のイメージ

障害者(児)等の対人認知イメージ調査の先行研究<sup>2~4)</sup>を参考に、身体的障害イメージ40項目の形容詞対からなる質問項目を作成し、①とてもそう思う、②かなりそう思う、③ややそう思う、④どちらでもない、⑤ややそう思う、⑥かなりそう思う、⑦とてもそう思う、対立している形容詞を双極とする7件法で回答を求めた。

質問項目は以下の40項目とした。

- 1) 幸福な-不幸な
- 2) 温和な-攻撃的な
- 3) 明るい-暗い
- 4) きれい-汚い
- 5) 素直な-いじわるな
- 6) 我慢強い-諦めのよい
- 7) 大きい-小さい
- 8) 努力する-怠ける
- 9) 自立的-依存的
- 10) 普通の-特別の
- 11) 愉快な-不愉快な
- 12) 繊細な-粗野な
- 13) 積極的-消極的

- 14) 静かな-うるさい
- 15) 早い-遅い
- 16) 健康な-病気の
- 17) 自由な-不自由な
- 18) 身近な-かけ離れた
- 19) 社交的-非社交的
- 20) 良い-悪い
- 21) 単純な-複雑な
- 22) 同調-反発
- 23) 有利な-不利な
- 24) 分かる-分からない
- 25) 近い-遠い
- 26) 穏やかな-激しい
- 27) 優しい-怖い
- 28) 関心のある-無関心な
- 29) 協調的-自己中心的
- 30) 楽しい-苦しい
- 31) 嬉しい-悲しい
- 32) 安易な-困難な
- 33) 純粋な-不純な
- 34) 簡単な-大変な
- 35) 便利な-不便な
- 36) 強い-弱い
- 37) 大人っぽい-子どもっぽい
- 38) 親しみやすい-親しみにくい
- 39) 洗練-素朴
- 40) 満足な-不満な

### 2.5 調査時期および実施方法

2003年6月から10月に、授業中およびホームルームの時間を使って質問紙の配布、回収を行った。

データの集計および解析にあたっては、SPSS11.5J For Windowsを使用した。

## 3. 結果

### 3.1 属性

#### 3.1.1 兄弟姉妹の有無

兄弟姉妹の有無についての有効回答は405で、兄弟姉妹のありが378名(93.3%)、兄弟

姉妹がなし(一人っ子)が27名(6.7%)であった。

### 3.1.2 祖父母の同居経験

祖父母との同居経験について有効回数は406で、同居経験のありが167名(41.1%)で、同居経験のなしが239名(58.9%)であった。

### 3.1.3 障害者との接触経験

障害を持った人との接触経験の有無については、有効回数409のうち、接触経験のありが245名(60.0%)で、接触経験のなしが164名(40.0%)であった。

さらに、障害者との接触経験がありと回答したものに対し、どのような接触経験であったのかを、6つの項目から回答を求め、それを分類した。

①「障害のある人が近親者にいる」を、接触経験の非常に多い群とし、次に、②「障害のある人が友人にいる」と、③「ボランティア活動」を選択した者を自発的接触経験の多い群、④「実習などの学校のカリキュラム」、⑤「施設見学」を選択した者を接触経験の少

ない群、また、①～⑤の項目に当てはまらない接触経験を、⑥その他の項目で自由記述させて、その内容によって接触頻度を分類した。

その結果、有効回答409に占める接触経験の非常に多い群が88名(21.5%)、自発的接触経験の多い群110名(26.9%)、接触経験の少ない群47名(11.6%)、接触経験なし群164名(40.0%)であった(表2)。

## 3.2 属性と障害者との接触経験の検討

属性と障害者との接触経験については以下に示すとおりである(表3)。

### 3.2.1 年齢階層による比較

年齢階層による比較を行ったところ、409の有効回答が得られた。

そのうち、高校1年生においては、接触経験が非常に多い群23名(5.6%)、自発的な接触経験が多い群19名(4.6%)、接触経験が少ない群8名(2.0%)、接触経験がない群29名(7.1%)であった。

高校3年生において、接触経験が非常に多

表2 障害者との接触経験

接触経験なし	接触経験あり245 (60.0%)		
	接触経験が非常に多い	自発的な接触経験が多い	接触経験が少ない
164名 (40.0%)	88名 (21.5%)	110名 (26.9%)	47名 (11.6%)

N=409

表3 属性と障害者との接触経験

属性		接触経験あり (%)				接触経験なし (%)
		接触経験が非常に多い	自発的な接触経験が多い	接触経験が少ない	小計	
年齢(N=409)**	高校1年生	23 (5.6)	19 (4.6)	8 (2.0)	50	29 (7.1)
	高校3年生	14 (3.4)	25 (6.1)	17 (4.2)	56	51 (12.5)
	大学生25歳未満	45 (11.0)	63 (15.4)	22 (5.4)	130	82 (20.0)
	大学生25歳以上	6 (1.5)	3 (0.7)	0	9	2 (0.5)
兄弟姉妹(N=405)	あり(N=378)	81 (20.0)	102 (25.2)	43 (10.6)	226	152 (37.5)
	なし(N=27)	5 (1.2)	7 (1.7)	4 (1.0)	16	11 (2.7)
祖父母と同居経験(N=406)**	あり(N=167)	35 (8.6)	55 (13.5)	24 (5.9)	114	53 (13.1)
	なし(N=239)	51 (12.6)	54 (13.3)	23 (5.7)	128	111 (27.3)

\*\* p<0.05

い群14名(3.4%)、自発的な接触経験が多い群25名(6.1%)、接触経験が少ない群17名(4.2%)、接触経験がない群51名(12.5%)であった。

また、25歳未満の大学生においては、接触経験が非常に多い群45名(11.0%)、自発的な接触経験が多い群63名(15.4%)、接触経験が少ない群22名(5.4%)、接触経験のない群82名(20.0%)であった。

25歳以上の大学生においては、接触経験が非常に多い群6名(1.5%)、自発的な接触経験が多い群3名(0.7%)、接触経験が少ない群0名、接触経験がない群2名(0.5%)であった。

年齢階層による障害者との接触経験の比較の結果、「接触経験が非常に多い群」において、25歳以上の大学生に近親者に障害者がいるというが多く、続いて、高校1年生に多く、高校3年生に少ないという有意さがみられた( $\chi^2=19.201$ ,  $df=9$ ,  $p<0.05$ )。

### 3.2.2 兄弟姉妹の有無による比較

障害者との接触経験の有無および、接触頻度を兄弟姉妹の有無で比較すると、兄弟姉妹のある接触経験ありが226名で、一人っ子では16名であり、兄弟姉妹がある接触経験なしが152名で、一人っ子11名であり、兄弟姉妹の有無は障害者との接触経験の有無に有意差はなかった( $\chi^2=0.03$ ,  $df=1$ ,  $n.s.$ )。

また、接触経験の頻度別においても、有効回答405のうち、接触経験が非常に多い群では、兄弟姉妹あり81名(20.0%)、一人っ子5名(1.2%)、自発的な接触経験が多い群では、兄弟姉妹あり102名(25.2%)、一人っ子7名(1.7%)、接触経験が少ない群では、兄弟姉妹あり43名(10.6%)、一人っ子4名(1.0%)、接触経験がない群では、兄弟姉妹あり152名(37.5%)、一人っ子は11名(2.7%)であった。兄弟姉妹の有無での比較は、障害者との接触経験において、有意差はなかった( $\chi^2=0.370$ ,  $df=3$ ,  $n.s.$ )。

### 3.2.3 祖父母との同居経験による比較

しかし、祖父母との同居経験の有無で比較してみると、祖父母との同居経験ありで障害者との接触経験のある者は114名、祖父母との同居経験なしが128名、障害者との接触経験のない祖父母との同居経験あり53名、同居経験なし111名で、祖父母との同居経験あり群が、有意に障害者との接触経験が多かった( $\chi^2=8.831$ ,  $df=1$ ,  $p<0.005$ )。

また、接触頻度別においても、接触経験が非常に多い群で、祖父母との同居経験あり35名(8.6%)、同居経験なし51名(12.6%)で、自発的な接触経験が多い群では、祖父母との同居経験あり55名(13.5%)、祖父母との同居経験なしは54名(13.3%)、接触経験が少ない群では、祖父母との同居経験あり24名(5.9%)、祖父母との同居経験なし23名(5.7%)で、障害者との接触経験を持たない者においては、祖父母との同居経験ありが53名(13.1%)、同居経験なしでは111名(27.3%)であった。

祖父母との同居経験の有無による比較においては、障害者との接触経験、そのなかでも、自発的な接触経験が有意に多くなることが観察された( $\chi^2=11.100$ ,  $df=3$ ,  $p<0.05$ )。

## 3.3 障害者イメージについての因子分析

障害者イメージの因子分析の結果は以下に示すとおりである(表4)。

### 3.3.1 障害者イメージの因子分析

形容詞対40項目について主成分分析を行った。固有値を1.5以上とし、抽出された5因子について、バリマックス回転を行った。第5因子までの累積寄与率は48.859%である。

第1因子は、20) 良い-悪い、19) 社会的-非社会的、18) 身近な-かけ離れた、22) 同調-反発、28) 関心のある-無関心な、16) 健康な-病気の、25) 近い-遠い、30) 楽しい-苦しい、13) 積極的-消極的、38) 親しみやすい-親しみにくいの10項目であった。

第2因子は、5) 素直な-いじわるな、6)

表4 障害者イメージの因子分析

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
良 い - 悪 い	.753	-.088	-.010	-.082	-.040
社 交 的 - 非 社 交 的	.701	-.199	.133	.013	-.163
身 近 な - かけ離れた	.664	-.061	.132	-.040	.088
同 調 - 反 発	.589	-.115	.120	.170	-.056
関 心 の あ る - 無 関 心 な	.537	-.243	.056	.262	.171
積 極 的 - 消 極 的	.468	-.160	-.082	-.112	.066
素 直 な - いじわるな	-.167	.687	.174	-.017	-.314
我 慢 強 い - 諦 め の よ い	-.029	.683	.293	-.102	.098
努 力 す る - 怠 け る	-.203	.682	.320	-.139	.081
温 和 な - 攻 撃 的 な	-.055	.639	-.064	-.028	-.139
き れ い - 汚 い	-.171	.612	-.189	.127	.134
大 き い - 小 さ い	-.123	.586	.026	.061	.065
自 立 的 - 依 存 的	-.262	.574	-.006	-.059	.204
明 る い - 暗 い	-.154	.567	-.141	.336	-.211
有 利 な - 不 利 な	.032	-.056	.711	-.117	-.084
自 由 な - 不 自 由 な	.397	.039	.578	-.260	.069
早 い - 遅 い	.217	.141	.576	-.082	-.088
単 純 な - 複 雑 な	.082	.107	.555	-.094	.158
分 か る - 分 か ら な い	.310	-.239	.466	.125	-.042
嬉 し い - 悲 し い	-.170	.063	-.117	.595	-.120
安 易 な - 困 難 な	.048	-.039	-.431	.587	.153
満 足 な - 不 満 な	-.115	.078	-.044	.584	.239
静 か な - う る さ い	.265	-.056	.029	.454	-.122
大 人 っ ぽ い - 子 ども っ ぽ い	-.170	.216	-.079	-.064	.649
洗 練 - 素 朴	.039	-.126	-.071	.233	.598
固有値	8.218	5.094	2.652	1.982	1.598
寄与率(%)	20.544	12.736	6.629	4.954	3.996
Cronbachのα係数	.7481	.8189	.6913	.5340	.5005

我慢強い-諦めのよい、8) 努力する-怠ける、2) 温和な-攻撃的な、4) きれいな-汚い、7) 大きい-小さい、9) 自立的-依存的、3) 明るい-暗い、27) 優しい-怖い、29) 協調的-自己中心的、26) 穏やかな-激しい、10) 普通の-特別な12項目であった。

第3因子は、23) 有利な-不利な、17) 自由な-不自由な、15) 早い-遅い、21) 単純な-複雑な、33) 純粋な-不純な、24) 分か

る-分からない、1) 幸福な-不幸なの7項目であった。

第4因子は、31) 嬉しい-悲しい、32) 安易な-困難な、40) 満足な-不満な、35) 便利な-不便な、34) 簡単な-大変な、14) 静かな-うるさいの6項目であった。

第5因子は、37) 大人っぽい-子どもっぽい、39) 洗練-素朴、11) 愉快的な-不愉快的な、36) 強い-弱い、12) 繊細な-粗野な、の5

項目であった。

他の因子との成分の差が.15以上の項目を除いた25項目を分析の対象とし、形容詞対の特性から、第1因子「距離感」、第2因子「性格行動特性」、第3因子「障害」、第4因子「充実感」、第5因子「発達」とした。

### 3.3.2 内的整合性(信頼性)の検討

Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、各因子の $\alpha$ 係数は、第1因子は.7481、第2因子は.8189、第3因子は.6913、第4因子は.5340、第5因子は.5005で、かなり信頼性があるといえる。

項目-全体相関においても、第1因子、20) 良い-悪い( $\gamma=.714$ ,  $p<0.001$ )、19) 社交的-非社交的( $\gamma=.770$ ,  $p<0.001$ )、18) 身近な-かけ離れた( $\gamma=.721$ ,  $p<0.001$ )、22) 同調-反発( $\gamma=.598$ ,  $p<0.001$ )、28) 関心のある-関心のない( $\gamma=.653$ ,  $p<0.001$ )、13) 積極的-消極的( $\gamma=.568$ ,  $p<0.001$ )と、かなり相関があった。

第2因子、5) 素直な-いじわるな( $\gamma=.771$ ,  $p<0.001$ )、6) 我慢強い-諦めのよい( $\gamma=.699$ ,  $p<0.001$ )、8) 努力する-怠ける( $\gamma=.754$ ,  $p<0.001$ )、2) 温和な-攻撃的な( $\gamma=.644$ ,  $p<0.001$ )、4) きれい-汚い( $\gamma=.612$ ,  $p<0.001$ )、7) 大きい-小さい( $\gamma=.602$ ,  $p<0.001$ )、9) 自立の-依存的( $\gamma=.656$ ,  $p<0.001$ )、3) 明るい-暗い( $\gamma=.616$ ,  $p<0.001$ )と、かなり相関があった。

第3因子、23) 有利な-不利な( $\gamma=.729$ ,  $p<0.001$ )、17) 自由な-不自由な( $\gamma=.759$ ,  $p<0.001$ )、15) 早い-遅い( $\gamma=.648$ ,  $p<0.001$ )、21) 単純な-複雑な( $\gamma=.622$ ,  $p<0.001$ )、24) 分かる-分からない( $\gamma=.583$ ,  $p<0.001$ )で、高い相関を示した。

第4因子、31) 嬉しい-悲しい( $\gamma=.652$ ,  $p<0.001$ )、32) 安易な-困難な( $\gamma=.763$ ,  $p<0.001$ )、40) 満足な-不満な( $\gamma=.591$ ,  $p<0.001$ )、14) 静かな-うるさい( $\gamma=.585$ ,

$p<0.001$ )と、かなり相関があった。

第5因子では、37) 大人っぽい-子どもっぽい( $\gamma=.815$ ,  $p<0.001$ )、39) 洗練-素朴( $\gamma=.819$ ,  $p<0.001$ )で、強い相関を示した。このことから、十分な内的整合性があるといえる。

### 3.4 障害者イメージについての比較

#### 3.4.1 障害者イメージの傾向

高校生および大学生の障害者イメージについて、いずれの属性との比較においても、第1因子「距離感」、第2因子「性格行動特性」は肯定的な数値を示し、第3因子「障害」、第4因子「充実感」、第5因子「発達」では否定的にイメージしている数値を示した。

#### 3.4.2 接触経験による障害者イメージの比較

各因子の平均を算出し、障害者との接触経験の有無で比較した。

第1因子「距離感」においては、有効回答407、接触経験あり群243名の平均値 $3.7\pm 0.7$ 、接触経験なし群164名の平均値 $3.9\pm 0.6$ と、接触経験のある群の方が、障害者との心理的距離をより近く感じているという有意差がみられた( $t=-2.484$ ,  $df=405$ ,  $p<0.05$ )。

しかし、第2因子「性格行動特性」では、有効回答は403、接触経験あり群240名の平均値 $3.4\pm 0.7$ 、接触経験なし群163名の平均値 $3.4\pm 0.7$ で( $t=0.468$ ,  $df=401$ ,  $n.s.$ )、第3因子「障害」についても、有効回答は405、接触経験あり群243名の平均値 $4.5\pm 0.6$ 、接触経験なし群162名の平均値 $4.5\pm 0.6$ で( $t=-.453$ ,  $df=403$ ,  $n.s.$ )、第4因子「充実感」についても、有効回答は403、接触経験あり群239名の平均値 $4.3\pm 0.4$ 、接触経験なし群164名の平均値は $4.3\pm 0.5$ で( $t=0.051$ ,  $df=401$ ,  $n.s.$ )、第5因子「発達」においても、有効回答は407、接触経験あり群243名の平均値 $4.3\pm 0.8$ 、接触経験なし群164名の平均値 $4.2\pm 0.6$ ( $t=0.263$ ,  $df=405$ ,  $n.s.$ )と、接触経験の有無

表5 接触経験による障害者イメージの比較

項目	接触経験あり (N)	接触経験なし (N)
距離感*	3.7±0.7 (243)	3.9±0.6 (164)
性格行動特性	3.4±0.7 (240)	3.4±0.7 (163)
障害	4.5±0.6 (243)	4.5±0.6 (162)
充実感	4.3±0.4 (239)	4.3±0.5 (164)
発達	4.3±0.8 (243)	4.2±0.7 (164)

\* p<0.05

表6 接触頻度による障害者イメージの比較

項目	接触経験が非常に多い (N)	自発的接触経験が多い (N)	接触経験が少ない (N)	接触経験がない (N)
距離感*	3.8±0.7 (88)	3.7±0.7 (108)	3.7±0.8 (47)	3.9±0.6 (164)
性格行動特性	3.6±0.7 (86)	3.3±0.8 (109)	3.5±0.6 (45)	3.4±0.7 (163)
障害	4.5±0.5 (88)	4.4±0.6 (108)	4.4±0.7 (47)	4.5±0.6 (162)
充実感	4.3±0.4 (86)	4.2±0.3 (109)	4.3±0.5 (44)	4.3±0.5 (164)
発達	4.3±0.8 (88)	4.3±0.7 (109)	4.2±0.8 (46)	4.2±0.6 (164)

\* p<0.05

による有意差はみられなかった(表5)。

### 3.4.3 接触頻度による障害者イメージ比較

障害者イメージを、障害者との接触頻度により比較を行ったところ、第1因子「距離感」では、有効回答は407、障害者との接触経験が非常に多い群88名の平均値は3.8±0.7、自発的な接触経験が多い群108名の平均値は3.7±0.7、接触経験が少ない群47名の平均値は3.7±0.8、接触経験がない群164名の平均値は3.9±0.6で、接触頻度に有意差がみられた( $F=3.227$ ,  $df=3$ ,  $p<0.05$ )。

これは、接触経験が少ない群、自発的な接触経験が多い群に、障害者との心理的距離を近くに感じており、接触経験が非常に多い群と接触経験がない群の両極に、障害者との心理的距離を遠くに感じているという結果であった。

しかし、第2因子「性格行動特性」では、有効回答403、障害者との接触経験が非常に多い群86名の平均値は3.6±0.7で、自発的な接触経験が多い群109名の平均値は3.3±0.8で、接触経験が少ない45名の平均値は3.5±0.6

( $F=1.740$ ,  $df=3$ ,  $n.s.$ )、第3因子「障害」では、有効回答405、障害者との接触経験が非常に多い群88名の平均値は4.5±0.5で、自発的な接触経験が多い群108名の平均値は4.4±0.6で、接触経験が少ない群47名の平均値は4.4±0.7で、接触経験がない群162名の平均値は4.5±0.6( $F=0.887$ ,  $df=3$ ,  $n.s.$ )、第4因子「充実感」では、有効回答403、障害者との接触経験が非常に多い群86名の平均値は4.3±0.4で、自発的な接触経験が多い群109名の平均値は4.2±0.3で、接触経験が少ない群44名の平均値は4.3±0.5で、接触経験なし群164名の平均値は4.3±0.5( $F=1.142$ ,  $df=3$ ,  $n.s.$ )、第5因子「発達」においても、有効回答407、障害者との接触経験が非常に多い群88名の平均値は4.3±0.8で、自発的な接触経験が多い群109名の平均値は4.3±0.7で、接触経験が少ない群46名の平均値は4.2±0.8で、接触経験がない群164名の平均値は4.2±0.6( $F=0.392$ ,  $df=3$ ,  $n.s.$ )であった。

第1因子を除く、その他の4因子について、有意差はみられなかった(表6)。

表7 年齢階層による障害者イメージの比較

項目	高校1年 (N)	高校3年 (N)	25歳未満大学生 (N)	25歳以上大学生 (N)
距離感*	3.9±0.8 (78)	3.8±0.6 (107)	3.8±0.6 (211)	3.4±1.0 (11)
性格行動特性	3.6±0.7 (76)	3.4±0.7 (105)	3.4±0.8 (211)	3.4±0.7 (11)
障害	4.4±0.6 (77)	4.4±0.5 (107)	4.5±0.6 (211)	4.5±0.6 (11)
充実感**	4.3±0.4 (77)	4.2±0.4 (106)	4.3±0.4 (209)	4.4±0.4 (11)
発達**	4.3±0.7 (77)	4.1±0.7 (107)	4.3±0.7 (212)	4.3±0.8 (11)

\* p&lt;0.05 \*\* p&lt;0.1

### 3.4.4 年齢階層による障害者イメージの比較

次に、障害者イメージの平均を年齢階層別に比較を行った。第1因子「距離感」では、有効回答407、高校1年生78名の平均値3.9±0.8、高校3年生107名の平均値3.8±0.6、25歳未満の大学生211名の平均値3.8±0.6、25歳以上の大学生11名の平均値3.4±1.0で、障害者との「距離感」において、年齢階層が高くなるほど障害者との心理的距離を近く感じているという有意差がみられた ( $F=2.770$ 、 $df=3$ 、 $p<0.05$ )。

第2因子「性格行動特性」では、有効回答403、高校1年生76名の平均値は3.6±0.7、高校3年生105名の平均値は3.4±0.7、25歳未満の大学生211名の平均値は3.4±0.8、25歳以上の大学生11名の平均値は3.4±0.7で、障害者の「性格行動特性」イメージにおいて、年齢階層による有意差はなく ( $F=1.646$ 、 $df=3$ 、 $n.s.$ )、また、第3因子「障害」においても、有効回答405、高校1年生77名の平均値は4.4±0.6、高校3年生107名の平均値は4.4±0.5、25歳未満の大学生211名の平均値は4.5±0.6、25歳以上の大学生11名の平均値は4.5±0.6で、年齢階層による有意差はみられなかった ( $F=2.030$ 、 $df=3$ 、 $n.s.$ )。

しかし、第4因子「充実感」では、有効回答403、高校1年生77名の平均値4.3±0.4、高校3年生106名の平均値4.2±0.4、25歳未満の大学生209名の平均値は4.3±0.4、25歳以上の

大学生11名の平均値4.4±0.4で、高校3年生を頂点に、障害者の「充実感」イメージが最も肯定的であると考え、それ以降、年齢階層が上がるごとに障害者の「充実感」のイメージは有意に否定的になっている傾向が観察された ( $F=2.103$ 、 $df=3$ 、 $p<0.1$ )。

第5因子「発達」においても、有効回答407、高校1年生77名の平均値4.3±0.7、高校3年生107名の平均値4.1±0.7、25歳未満の大学生212名の平均値4.3±0.7、25歳以上の大学生11名の平均値4.3±0.8で、高校3年生を頂点に、障害者の「発達」イメージが最も肯定的であると考え、それ以降、年齢階層が上がるごとに障害者の「発達」のイメージは有意に否定的になっている傾向が観察された ( $F=2.421$ 、 $df=3$ 、 $p<0.1$ ) (表7)。

## 4. 考察

### 4.1 障害者イメージ

高校生および大学生の障害者イメージが、いずれの属性との比較においても、第1因子「距離感」、第2因子「性格行動特性」は肯定的に近い数値を示しているということは、若い世代の人々が障害者に対する支援活動に肯定的なイメージを持っているといえる。

しかし、第3因子「障害」、第4因子「充実感」、第5因子「発達」では否定的にイメージしていることを示しているということから、支援が必要であり、現在、十分に行われていないとイメージしていると推測される。

#### 4.2 障害者との接触経験からみるイメージ 変容の要因

障害者との接触経験の有無、および、接触頻度において、第1因子「距離感」のみに有意差がみられた。このことから、障害者との接触経験が、障害者イメージの変容に関わる要因になると推測される。

一方、第1因子を除く「性格行動特性」「障害」「充実感」「発達」の4つの因子については、接触経験の頻度や内容は、障害者イメージを変容させる要因とは考え難い。

第1因子「距離感」と、それを除く「性格行動特性」「障害」「充実感」「発達」の違いについては、「距離感」は、障害者と質問紙に答えた学生および生徒の「障害者と私」という二者の関係を問うものであったのに対し、「性格行動特性」「障害」「充実感」「発達」の4つの因子は、障害者自身のイメージについて問うものである。

そのことから、障害者との関係を示す「距離感」は、障害者と接触する経験をするのが、イメージの肯定的変容に関わる要因であると考えられる。

障害者との「距離感」、すなわち、心理的距離については、接触経験の少ない群が最も近くに、続いて、自発的な接触経験の多い群が、より近くに感じていたという結果から、障害者との接触経験が少ない学生・生徒に対しては、実習等の教育カリキュラムの実施において、障害者との心理的距離のイメージを、肯定的方向へと変化する可能性を示唆するものである。つまり、教育カリキュラムであっても、障害者との接触経験を持つことが、距離感のイメージの肯定的方向への変化に有効であるといえる。

障害者との接触経験を実習という形式で大学生に行き、障害者のイメージが肯定的方向に傾くという結果は、先行研究<sup>5-7)</sup>でも示されており、今回の結果からも、障害者と接触するという経験が、「障害者と私」という

二者の心理的距離を縮小し、障害者をより身近に感じるという点において、意味を持つということが示唆される結果であった。

しかし、近親者に障害者がいるという、最も障害者と接触経験が多いとされている群が、障害者との接触経験のない群に続いて、障害者との心理的距離を感じているという今回の結果は、障害者との接触の頻度に比例して、肯定的イメージを持っているという先行研究<sup>7, 8)</sup>とは異なる結果であった。

これは、近親者に障害者がいる人が、障害者との「距離感」をより遠くに感じている理由として、障害者を常に日々の生活の中で支援し続けていることに対する負担感や、「世間」とされる社会的集団からの障害者に対する疎外感を、日常的に突きつけられているといった状況が、近親者に障害を持つ者にあるためではないかと考えられる。

家族に障害を持った人を迎える、あるいは、障害を持った人とともに生活することについての負担感や疎外感について、要田は著書の中で、[わが子に障害があることを知った親たちの“とまどい”を感じる。それは、「世間」の「常識」としてのある否定的な障害者観を背景的知識として持つ「世間の目」に圧倒的に打ちのめされ、なすすべのない感情を表している。打ちのめされるのは、自らの内にくみこみ>が内面化されているからである。

「世間」とは、他者に対して優位であろうとする競争の場であるが、「障害」があるということは、「世間」の価値基準から明らかに劣位に位置し、みられる側(差別される側)に立場が移動することであった。つまり、この“とまどい”とは、自分が他者に対して表現したい優位な自己呈示(アイデンティティ管理)ができない時に表現される感情ではないだろうか。]と述べている<sup>9)</sup>。

このことから、近親者に障害者がいる群において、常により一層の努力が求められ、その結果、障害者の近親者の負担となって、

障害者との「距離感」としてイメージされたのではないかと推測する。

障害の不便さを感じながらも、不幸ではない生活を営んでいる人を肯定的に評価し、参考にすることは、障害を持つ人やその周囲の人々にとって、モデルとなる一事例ではあるが<sup>10)</sup>、メディアを通じて得られるそれらの情報は、メディアの持つ性格から、障害者が行うべき理想の姿として捉えることや、それを障害者の一般的姿であるかのように捉えられるという危険性をも、併せ持っている。

また、櫻田は、[障害を持つ多くの人々が求めているのは、「弱者」として扱われる社会からの恩恵を施されることではなく、障害を持たない人が当たり前のこととして送っている日常を自分にも送らせて欲しいということではないだろうか。障害を持つ多くの人々にとっても、就学、進学、就職、結婚、子供の誕生と養育といったように、誰にでも訪れる人生の局面は、当然のように迎えたのである。そこでは、「強者」と「弱者」という区分けを付けること自体が意味を持たない。あるのは平凡な人々の平凡な願望だけである。にもかかわらず、そのようなことは真面目に顧慮されることもなく、現在、「弱者の救済」の掛け声だけが宙を飛び交っている。なぜ「弱者」であるはずもない人々は、これほどまでに「弱者」の存在を「自明の前提」の如く考え、その「救済」に執着しているのだろうか。「弱者の救済」という大義が、却って「弱者」を作り出す。「弱者」でない人々は、何故、そのような側面があるかもしれないことを真面目に慮ろうとしないのであろうか。]と述べている<sup>11)</sup>。

今回の結果は、近親者に障害者がある人々が、努力を強いられるような環境に置かれている可能性を示唆するとともに、家族というサポートシステムに依存してきた現在の障害者支援のあり方について、今後の検討の必要性も示唆しているものであると考える。

障害者の「生きがい」は家族よりむしろ、家族以外のソーシャルサポートが重要であるといわれていることから<sup>12, 13)</sup> ソーシャルサポートを考えることは、課題の1つであると考えられる。

しかしながら、今回の調査では、近親者に障害者がある群が高校1年生に有意に高かったというバイアスがあったため、再び調査を行い、検討することが必要であると考えられる。

#### 4.3 年齢階層からみるイメージ変容の要因

年齢階層による比較においては、第1因子「距離感」に、年齢階層が高くなるほど障害者との心理的距離を近く感じているという有意差が観察された。これは、障害者理解につながる学校教育や、生活年齢が長くなれば長くなるほど、障害を持つかそうでないかを意識せずに、障害者と接触経験を持つということが、日常生活の中で経験しているのではないかと推測される。

第2因子「性格行動特性」と第3因子「障害」について、障害者との接触経験および頻度ならびに年齢階層別の比較において、有意差が観察されなかったことは、イメージの形成において障害者と実際に接触することによって経験を積むことや、学校で教育されることよりも、メディアの影響が強いものと考えられることができる。すなわち、「性格行動特性」と「障害」に対してのイメージ形成に対して、積極的な介入の必要性があるかを検討すべき事項であると考えられる。

それに対して、第4因子「充実感」や第5因子「発達」では、高校3年生を頂点に、障害者イメージが最も肯定的であると考え、それ以降、年齢階層が上がるごとにイメージは有意に否定的になっている傾向が観察された。

これは、障害者の特別なニーズに対する評価が、年齢階層が上がるほど、十分とはいえないとイメージされているといえる。

換言すれば、日本の社会において、義務教

育と同様に多くの人々が修学する高等学校段階までは、年齢階層が上がるほど、障害を持つ人に対する、福祉や教育をはじめとするフォーマルなソーシャルサポートによって、障害を持つ人自身の「充実感」や「発達」が保障されているとイメージしているが、高等学校卒業後は、年齢階層が上がるにしたがって、「充実感」や「発達」に対するサポートが十分ではないとイメージされていると考えることができる。

つまり、第4因子「充実感」および第5因子「発達」は、障害者との接触経験や頻度による比較において、有意差が観察されなかったという結果からも、直接的な経験から障害者イメージが形成されるというよりは、むしろ、学校教育を含む、社会教育の中で形成されている部分が大きいと推測されるところである。特に、高等学校までの、皆が同様の教育課程をたどる期間において、障害の有無に関係なく、「充実感」や「発達」の保障が、平等に与えられていると考え、皆が一様の教育の課程をたどらないようになった大学生において、障害者のニーズが、それぞれに他とは異なる理由からなるニーズであると、意識されるのではないかと考える。

#### 4.4 障害者イメージ変容への教育的介入の方向性

今回の結果から、高齢者との同居経験のある学生・生徒の方が、ボランティア活動などといった自発的に障害者との接触経験を持っていることがわかった。このことは、異なる体験や文化をもつ高齢者世代と、日常的に接することによって、障害という異なる体験を持っている人との心理的な抵抗が、より低く感じられるのではないかと推測する。

今後、若い世代の人々が、自発的な障害者支援が行えるようになるためにも、異なる体験や文化を持つ人々と、日常的かつ継続的に接する体験を、教育カリキュラムの中に取り

入れていくことも、有効な教育的介入ではないかと考えるところである。

また、近親者に障害者がいる人が、自発的な接触経験を持つ者や障害者との接触経験が少ない者よりも、障害者との心理的距離を遠くに感じていることから、障害者の一番近くにいる家族に対する支援も、障害者支援の枠組みとして、認識させていく教育が必要であると考えられる。

#### 5. 本調査のまとめと限界

本調査は、人間発達に関連する学部の大学生や、カトリックミッションスクールといった、比較的、障害者支援意識が高いと思われる学生・生徒の集団を調査の対象者とした。そのため、今回得られた結果が、今後の障害者支援や介護を担う世代の指標よりも、障害者支援に肯定的な結果であった可能性が、否定できない。

また、調査対象者のほとんどが女性であり、性別というバイアスがあるため、一般的な学生の意識であるとはいえないという限界があった。

#### 引用・参考文献

- 1) 国民衛生の動向・厚生指針 臨時増刊・第51巻第9号、通巻800号(2004)
- 2) 長島貞夫、藤原慶悦、原野広太郎、斎藤耕二他：自我と適応の関係についての研究(2) — Self-Differentialの作製、東京大学教育学部紀要、13、59-83(1967)
- 3) 堀江幸治：大学生の障害児に対するイメージの変容についての研究 — 心理リハビリテーションキャンプを通じて —、リハビリテーション心理研究、22-23、79-87(1995)
- 4) 黄懐芬：知的障害者に対するアジア諸国の人々のイメージ、発達障害研究、22、137-142(2000)
- 5) 堀江幸治：大学生の障害児に対するイメージの変容についての研究 — 心理リハビリテーションキャンプを通じて —、リハビリテーション心理研究、22-23、79-87(1995)

- 6) 奥山清子, 西崎博子, 八重樫牧子, 本保恭子: 障害児教育実習を通して得られた「障害児」と「教職」に対するイメージの変容, ノートルダム聖心女子大学紀要, **21**, 7-14 (1997)
- 7) 奥山清子, 西崎博子, 本保恭子, 八重樫牧子: 聴覚障害児に対する意識とイメージの変容, ノートルダム聖心女子大学紀要, **21**, 41-46 (1997)
- 8) 黄懐芬: 知的障害者に対するアジア諸国の人々のイメージ, 発達障害研究, **22**, 137-142 (2000)
- 9) 要田洋江: 障害者差別の社会学 — ジェンダー・家族・国家 —, 岩波書店, 17-134 (1999)
- 10) 乙武洋匡: 五体不満足, 講談社 (1998)
- 11) 櫻田 淳: 「弱者救済」の幻影 — 福祉に構造改変を —, 春秋社, 20-113 (2002)
- 12) 徳珍温子, 藤田大輔: 中途障害者の「生きがい」喪失を改善するための方向性について, 第63回日本公衆衛生学会総会抄録集, 723 (2004)
- 13) 徳珍温子, 藤田大輔: 中途障害者の生きがいとソーシャルサポートの関連について, 大阪信愛女学院短期大学紀要, **38**, 19-32 (2004)

(受理 2005年2月2日)